

---

# The Cyber World

電子の鷹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Cyber World

### 【NZード】

NZ122N

### 【作者名】

電子の鷹

### 【あらすじ】

小学生の頃にはもう自分のパソコンを持っていた。そして中学3年生を卒業する頃には伝説的なハッカーになっていた。その青年にはもう世界のセキュリティはタダの南京錠以下になっていたのである。

そんな青年が普通に高校に通い。普通の学校生活をおくりながら電脳世界で生きていくストーリー

## プロローグ

### 登場人物

・天沢

七威斗

桜坂高校に通う高校2年生。普段はどこにでもいる高校生だが、电脑世界では伝説的なハッカー、「Local STAR」を名乗っている。親は小さい頃に他界。今は一人で暮らしている。

・遠藤

沙織

主人公とは小学校からの幼なじみ。最近七威斗に恋愛感情を持ち始めている。

・倉井

隆之介

桜坂高校に通う高校2年生。主人公とは仲のいい友達。

・佐藤

燈真

桜坂高校に通う高校2年生。親が金持ちだが海外に住んでいて大きい家に一人暮らし。

そんな桜を見ながら「新学期に相応しい天気だなあ。」と快晴の空を仰ぐ。

新学期。俺は通いなれた通学路を歩いていた。その通学路の一角にある公園は春になると沢山の桜を咲かす名所だった。その通学路を通るのは少し遠回りなのだが俺は時間がある日はいつもここを通って学校へ向かっている。

やつじうじこぬちに公園の出口が見えてきた。この公園を出るとすぐに学校だ。

この学校に通りて2年生になるけどまだここに通学路だなと思つ。

わあ、今日は始業式だ。張り切つて行つ。と氣を引き締めて校門にむかつて歩き始める。

## 第一話 始めつの日（前編）

えー、ハイペースですが暇なときはじっくり更新していくのでどうぞ  
ぞいぞ覗ください。

## 第1話 始まりの日

教室にはすでに半数以上の人気がいた。

その中から一人りの女子が「こちらに」さしつく、そして「こちらに向かって」くる

「おはよー。遅かったね」と微笑んでくる。

「おー。ちよつと散歩がてら歩いてたらこんな時間になっちゃった。

」

「桜公園だね。七戻斗あそ」好きだもんねえ」

「まあな

そして俺は窓側の一一番後ろに座る。

携帯を開き、自宅のデスクトップをリモートアクセスし、作りかけのプログラムを開く。最後のバグ修理をしてみると先生が教室に入ってくる。

「よし、お前ら~廊下に並べー。」携帯をしまい廊下に出る。

そして並ぼうとする倉井が近づいてきた。

「おす、元気ねえ~な」と話しかけてきた。

「やうか?俺はいつも通りだけど

「そつか。ならいいけどよ。今年じゃあ氣づいてやれよ。(ニヤニヤ)」

「何に?」と当然の疑問を投げかけた。

「えつ、・・・マジで氣づいてないの?」

「だから何にだよ。」

「かわいそうに。まあ、その話はおこといて早く並ぼうぜ」と走つていいく。

「なんなんだよ。」といいながら俺も列に並ぶ。

～講堂～

ここの中学校は私立なだけあって設備がかなり立派だ。それだからか1000人ぐらいは入るだらう。

そして校長やその他先生が話を進め。最後に新学期の諸注意を話し終了。

1学年から教室へ戻り始める。

沙織が近づいてきて

「ねえねえ、今日はこれで学校は終わりだけど。・・・(もぐもぐ)とが口をもぐつかせる。

「?.なんだよ。」と沙織の顔を見る。

(カアア) 「いや、だから、あの・・・これからどうか遊びに行かない?」

「あ、ああ。いこよ。じゃあ、2時くらいに桜公園の前でいいか?」  
と当然のように元気。

「うそー。じゃあ、後でー」といつたりやへ教室から出て行く。

セレジめずらしへ燈真が

「よお、ひやしふり。春休みは元氣にしてたか?」と話しかけてきた。

「ああ。普通通りや。」

「せつか。で、これからのお予定は?」

「沙織に誘われてるけど、なんで?」

「いや、ラーメンでも食に行こうかと思つたけど沙織ちゃんならダメだな。しつかり遊んでこよう。」と言しながらカバンを持って教室を出て行く。

「へんなやつ。」

さて、俺も帰るかな。とカバンを取り出し荷物を詰める。

そして昇降口へと向かう。

そして桜公園を通り家へ向かう。

「ただいま」といつても家には誰もいない。親は小さい頃に既に他界している。今は引き取ってくれた従兄弟に仕送りを少ししてもらいながらアパートに住んでいる。

俺の部屋はデスクトップPCが占領している。

本体が3台ありそれが床においてある5台のディスプレイにつながれている。

そして持ち歩きようのノートPCを電源アダプタにつなげる。

制服から私服に着替え、パソコンの電源を入れる。

暇なので防御用プログラムを書き始める。

～2時間後～

そろそろ時間だな準備するか。と壁にかけてあるカバンをとつてノートPCをカバンに入れ、財布などをポケットに入れる。

そしてパソコンの電源を落とし、冷蔵庫からお茶を取り出して飲む。

「そろそろ行くか。」とカバンを持って外にでる。鍵を締め、鉄階段を降りる。

桜公園に着き時間まで30分ぐらい余裕があるので桜公園を散歩し始める

「いい天気だなあ～」と左のベンチにあるベンチに座る。

あれやこれやとじっくり時間をがきた。

「よし、入り口に行くか。」ビーンチから立ち上がり入り口の方へ歩いていくとすでに沙織が私服でいたので、驚かせてやるつと思いつらから静に近づいていく。まったく気づかないのとそのまま

「ねつやーーー」と肩に手をやると

「うわああーーー」と思って飛び出た。そのままビーベット

「わっこ、そこまで驚くとはーーー

「う、ううう。少し緊張してたから」と笑った。

(普通にカワイイ・・・)

「どうしたの?」と声をかけてきて俺は我にかえった。

「あ、いや。なんでもない。」

「やつか、じゃあ。行こう。」と俺の手を引いていく。なぜだろう、前にもずっとやっていたことなのにちょっと心がくすぐったい。

そんな事を考えながら俺は桜公園を後にして沙織と一緒に駅へと向かっていく。

## 第1話 始まりの日（後書き）

・・・締めが悪すぎるんですが。

スマセン。駄文ですが、愛読ありがとうございます。

次回作もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0122z/>

---

The Cyber World

2011年11月30日22時46分発行